

昭和二十五年八月十五日發行（毎月一回十五日發行）（通第十七號）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

慈

光

第二卷・第八號

目

法然聖人の常の法語……………	花田正夫	(1)
法然聖人の獲信……………	中野駿太郎	(2)
笑つて餓死する……………	松村繁雄	(4)
今は亡き長男文男と語る……………	麻生介	(7)
疾病と求道……………	編者	(10)
信味点滴……………	編者	(14)

次

法然聖人の常の法語

いけらば念佛の功つもり、しなば淨土へまいりなん。とてもかくてもこの身には、思いわづらう事ぞなき、と思ひぬれば死生共にわづらいなし。

たとい餘事をいとむとも、念佛を申し申しこれをするとおもひ、餘事をしつつ念佛すとはおもうべからず。

我はこれ烏帽子もきざる男なり。十惡の法然房、愚痴の法然房が、念佛して往生せんというなり。

本願の念佛にはひとりだちをさせて、すけをささぬなり。すけというのは、智慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすなり。

善人は善人ながら念佛し、悪人は悪人ながら念佛して、ただむまれつきのままにて念佛する人を、念佛にすけささぬとはいふなり。

法爾の道理ということあり。ほのほは空にのほり、水はくだりさまにながる。果物のなかに、すき物あり、あまき物あり。これ等は皆法爾の道理なり。

阿彌陀佛の本願は、名号をもて、罪惡の衆生をみちびかんとちかい給うたれば、ただ一向に念佛だに申せば、佛の來迎は法爾の道理にてうたがいなし。

「佛阿難に告げたまわく、汝よく是の語をたもて、是の語をたもてとは、即ち無量壽佛の名をたもてとなり」といえり。名号をきくというとも信ぜずばきかざるが如し。たとい信ずというとも唱えずば信ぜざるがごとし。ただ常に念佛すべきなり。

上人の常の仰に。我は烏帽子もきぬ法然房なり、黒白も知らぬ童子の如く、是非も知らぬ無智の者なり。

只念佛往生を仰で信ず。釋迦は「念佛して往生せよ」と勧め。彌陀は「念佛せよ、來迎せん」と仰られたり。この一事を信じて余事をしらす。

上人の常の仰には。源空が智慧をもて人を化する、なお不足なり。法性寺の空阿彌陀佛は愚痴なれども、念佛の大先達として、あまねく化導ひろし。我もし人身をうけば、大愚痴の身となり、念佛動行の人たらんとぞ、仰られける。

法然聖人の獲信

花田正夫

念佛成佛の大道は、その源遠くはるかである。一切老小善惡の衆生に、念佛せしめ、本願を信ぜしめ、成佛せしめずば、おくまいとの、彌陀久遠の誓願にはじまる。

釈迦佛出世の本懷は「ただ彌陀の本願一つを説かんとたり」と教えられる。同心し大懺悔した阿闍世王の眼にうつる釈迦佛の御心事を

「如來は一切のために、常に慈父母となりたまへり。當に知るべし、もろもろの衆生は、皆これ如來のみ子なり。

世尊の大慈悲は、衆のために苦行を修したまふこと、人の鬼魁にくるはされて、狂乱して所爲多きが如し。」

と驚きたたえている。はたから見たらおかしいと思われるかもしれない、恥も外聞もかまつていられない、一切衆生の慈父母として、ものぐるおしいばかり苦勞されてやまない、如來矜哀の大悲、救済に没頭してられる御姿を感佩している。

印度・支那・日本の三国の高僧、七祖聖人方は、このこと一つを生命にかけて御信証下され、生涯を通じて御勤め下されているのであるが、特に法然聖人の獲信の経路は、最も鮮やかに信証され、世界に全くくらべものないところである。

憶うに聖人は約七百年の昔、岡山縣作州に生れられたが、父君時國が殺害せられ、父君の臨終に、

「恨みは恨みによつて解決されない。恨みは恨みなきによつてのみ解消される。だから父の仇をねらう心を捨てて、敵も共に救われて行く大道を得よ。それが父に対する唯一の孝行である」

との遺言をうけて出家された。時に御年九歳であつた。其後十五の御時、比叡の山に登られたのであつた。

それ以後の求道の模様を聖人御自ら聖覚法印に語られたところによると

『当時の佛教各宗の如きも、天台・華嚴をはじめとして、眞言・佛心の諸宗から、法相・三論にいたるまで、それぞれ深く立ち入つて、研究もして見たのですが、要するに皆佛性を悟るといふことを目的とするものでして、はいつて行く入口こそちがえ、落ち着く先は皆一つなのです。

どの宗にしましても、説いてる教は、幽玄高妙を極めた、まことに立派なものばかりなのです。が、いかんせん、私共の器量がそれとはとても釣り合いません。

經典を解し、行法を修するには、私どもの智力は余りに貧弱です。で、ここをこうして行けばいいといふことがのみこめていないのですから、これでは迷を離れるたよりがない、とすると惡道へおちるにきまつてゐる。と朝から晩まで、そのことばかりが氣になつて、心配で心配でたまらないのです。何のことはない、渡に船を失ひ、やみに道に迷つたよう

れたのだ」と大声に叫ぶと同時に、やるせないかたちけなきに涙がとめどなく流れて來るのです」

時に聖人四十三歳の春であつた。父君の横死と遺言を機として、出家登山されて以來、佛を理想として修学修行、遂に四十三歳に及ばれて、矢つき刀折れて、一步も半歩も近ずき得ぬ身を自覺せられ、自ら佛法の器ならざる身を知られると共に、善導大師の御勸化に浴せられて、彌陀佛の御本願は「私のようなして見ようのないものの爲であつた」と頂かれて念佛一行に帰せられたのであつた。ここがゆるぎない信のきまりである。

私共は出來もしない理想に惑わされて、愛だ、奉仕だ、平和だ等々と大言壯語しているが、徹底して爲し遂げ得るものが何一つとしてあるであろうか。いずれもいずれも水に描いた絵のように、消えて行き、崩れて行くものばかりである。渴愛と無明のはげしい煩惱に遠い昔からまつわられてゐる者

笑つて餓死する

自由と平等

人間として、笑つて餓死することができさえすれば、これ

なもの、氣ばかりあせつて、どうすることも出來ないので

だといつて、そのままぢつとしてもいられない。で、仕方がない、めける心に鞭打ちながら、なお学習を續けて行つたのです。黒谷の法恩藏へはいつて、一切經をひらいてみたこともありました。それも一度や二度ではない。都合五遍までやつたのでしたが、それでもまだ悟に出来る道はみつかりません。

こうして悲數のなかから覺束なくも、だんだん研究の歩を進めて行くうち、宿善開榮の時節が到來したといふものでありましようか、特に善導大師の聖書に目がとまりまして、拜讀するに従つて、私のような十惡の凡夫が、佛に成れる道が説いてあるのに氣付きました。まだ深い意味はわからないながらも、何だかうれしくてうれしくて、ぞくぞくと身の毛がよだつように覺えまして、繰返し繰返し三遍よんだのです。都合あわせて八遍よんだのですな。

その最後の回でした。觀經散善義の「一心に専ら彌陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近を問はず、念々にすてざれば、これを正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に」とある御文を讀んだ途端、忽然として大師のみ心に觸れることが出來たのでした。

あまりのうれしさに、そばで聞いている人もないのに「私のような、してみようのないものの爲、阿彌陀佛は、救いの法を、法藏菩薩と名告られていた昔から、ちやんときめておか

の逃れられぬ暗黒である。そこを法藏因位の昔から、何処までも見抜かれて、そうあるより外ありやうがないのがお前の本性である。それを不憐に思う、そこ一つが可愛相と想う、との彌陀の大悲ましますと知らされて、聖人は覺えず大声をあけて、落涙千行萬行せられたのであつた。

あももなれない、こうもなれない、「三尺の蛇は三尺の蛇であるより外あり様のない」、そこを見てとつて下さる御眞実、南無阿彌陀佛にあい奉つては、もうかえす言葉もない。そうした廣大な御心は、地上にまたと一つとないのである。たつた一つである。

「南無阿彌陀佛 往生之業 念佛爲本」

の一句は、金文字となつて、無碍の光明をはなつ。法然聖人八十年の御生涯は、天に叫び、地に刻して、この一事を御勧め下さつたのであつた。

中野 駿太郎

ほど幸福なことはない。人間の最後にほしいものは、ただこの境地を得ることだけだと思ふ。

死んではならないという心が、心の底にある。しかし、そういう心が心の底にある間は、心は透明になつていない。それは一つの錯覚におちいつているのである。これを迷いという。そこからあらゆる悩みがおこつてくる。そしてそこから動いて来る生活は、一切無意味なものとなる。

だが、そういう間違つた心に対して、それを少しも攻めず、どこまでも憐れんで下さるのが佛陀のお慈悲である。露一点攻めぬ。あわれみばかりで向つて下さる。それが絶対のお慈悲である。この絶対のお慈悲が徹到するとき、ここにはじめて無明の闇が去つて、光明の世界に生れさして頂くのである。そしてそこに、永遠の生命をみとめる。

人間の世界、迷いの世界は五分五分の世界である。善いものは善いとして、悪いものはいけなしいとしてしりぞける、これが五分五分の原則であるが、その原則にしばられて動きがつかないのが、迷いである。佛教で解脱（けだつ）ということというが、この解脱というのは、この五分五分でしばられている、そのいましめが解け、いましめから脱して、自由の天地に生れたことをいうのである。自由と平等ということを使うが、本当の自由は、この五分五分から解放された境地をいうのであつて、この境地には、宿善が熟して来れば誰でも達しうる。そして達し得た境地はみな平等なのであるから、信仰の天地には、一面この自由と平等とが実現しうることになる。

人間であるかぎり、誰しも死ななければならぬ。死ねば

がどういふ風にして解けるのか。

人間というものは、この目に見える肉体を離れてはあり得ない。心というものは、この肉体に宿つている。この身心をあわせて人間といつているのであるが、肉体をもつ人間であるかぎり、どうしても一面この死にたかないという心がある。つまり生きていたいという欲であるが、この欲のなくなるといふことはない。欲がなくなれば、当然そこに悩みは起るわけであつて、それゆゑこの煩惱というものは、一面たれでも人間生きていくかぎりは持つている。根だやしにすることはできない。次から次と起つてくる。

そこでこの煩惱が起つてくるときに、人間は五分五分にくらべているのであるから、「アアこの煩惱が起つて来た、これでは駄目だ」と思う。それでたちまち行きづまる。ところが「ナニ駄目なことがあるのか。それはもともと駄目なのであるが、その駄目がどうにもならぬ」といふことを見たから、その駄目をあわれむ、それに對して露一点悪く思わぬ。どこまでも同情する。それがわが心ぞ」と、この駄目をすてぬ、五分五分はなれたお慈悲が佛陀のお慈悲なのである。それでこのお慈悲に思い至るなり、「アア有難い」と、このお慈悲一つに満腹せしめられる、これが信仰の徹底で、このとき五分五分の世界から五分五分はなれたお慈悲の世界へ引きとられるので、そこに光明の世界がひらけてくる、この境地を菩提という。

煩惱即菩提というのは、悩みがそのままさとりであるとい

どうなる。まだ死んだことがないので、その気持ちを表現することはできないが、とにかく現在目に見えているこの世界から去つてしまふ。このことは事実である。考えて見れば淋しいことである。たよりないことである。だから誰しも死にたくないと思う。これは無理のないところである。死にたくない、死ぬのはいやだと思ふ。

しかし、死ぬのはいやだが、どうしても死ななければならぬ。生れて来たからには一度は死ななければならぬ。そこに人間の矛盾があり悲劇がある。いな、これは見ようによつては、死ななければならぬ人間が、死にたくないと思つている。死にたくないという心の基盤の上にあつて生活しているといふことは、一つの喜劇であるかも知れない。

悲劇でもあり喜劇でもあるが、それが人間の迷いの状態である。悲喜劇といふこともあるが、これはたしかに悲喜劇であるにちがいない。この悲喜劇から脱する、これが人間の究極の目的である。そこから目覚めた生活がはじまる。

煩惱即菩提

大乘佛教では煩惱即菩提（ほんのうそくほだい）と云う。煩惱というのは悩みである。菩提というのはさとりである。これは黒と白、闇と光といつたように、正反對のものである。この正反對のものを即という字で結びつけてしまふ。違つたものが同じだといふ。これは一体どういふことか。この謎をとくのが信仰である。信仰の体験である。それではそ

うのではなくして、悩みを憐れむお慈悲のために、その悩みがとがされてしまつた、そこが悟りといふことで、氷がとけて水となる、この氷がとけて水となることを、煩惱即菩提といふのである。

正しい人間の道

われわれは精神的に云うて貧乏人である。いな、山ほど借金を持つているのであるが、その借金をはらつて、そのうえいくらでも金を恵んで下さる財産家の友達を持つことができれば、貧乏人であつて金持ちとなることができる。信仰とは実は、貧乏人でありながら金持ちを友人に持つたことであつて、ここに即の字の微妙なはたらきがある。ここで何処までも注意しなければならぬことは、われわれはどこまでも貧乏人であるといふことである。もしも自分が金持ちになつたと思ひあやまつたならば、そのとき信仰は、雲散霧消してしまふ。

どこまでも人間生きていくかぎり、煩惱即菩提である。煩惱即煩惱ならばなんの意義もないことだし、菩提即菩提といふことは、人間世界にはあり得ないのである。貧乏人であつて金持ち、そこをどこまでも忘れてはならぬのであつて、それと同時に、折角この金持ちの友人を持つたことであるから、この無限の財宝を思う存分につかう、そこに楽しい生き甲斐のある人生が展開されてくるのである。

信仰を得れば、なぜ笑つて眠死することができるか。それ

は笑つて餓死することのできない、そのしてみようのないものを捨てぬ、そこを露一点悪しく思わない、この五分五分はなれた佛陀のお慈悲を知らされることによつて、そこに永遠の生命をみとめ得ることになるから、笑つて餓死することができることになるのである。それ故そこに、われとして誇りうべき何物もなく、ただ懺悔と感謝とがあるばかりとなる。この懺悔と感謝とはなれて、信仰生活はあり得ない。餓死ということは、人間最悪の状態である。貧乏のドン底である。また死ということは、病氣の最後のゆきつき場である。人間は貧乏と病氣とに悩む。しかしその貧乏と病氣とを克服する、それが信仰である。

今は亡き長男文男と語る

松村繁雄

皆が、全霊を傾けて平和日本の建設に精進せねばならぬ時、死児の辭をかぞえて、いたづらに哀愁に胸を打たるる等のことは、嘲笑に値する一私事に過ぎぬかも知れぬ。だが、池底をきわめずしては水量は語られない、哀愁を越えずしては眞の光は生れ得ぬ。二十七歳にして多くの夢を残

して往つた愛兒を偲ぶにつけても、又、幼にして父に別れた可憐の孫を見るにつけても、しみじみと胸に迫つて來るものは、今次の大戦に於いて、子を失い、夫を失いし数々の方々の、忘れようとして忘れ得られぬであらうその哀愁のことである。

私は今、そう云う方々と共に泣きたい、泣いて泣いて泣き濡れて、その中から「人生の眞の光とは何ぞや」と言う問題に、すつきりとした解決をつけたい。それは私の大事な義務であると思う。

茲に亡兒の三週忌（九月十八日）を近く迎えるに當つて拙文を公開する所以のもの、單に哀愁を訴えて、同情を買おうとするが如き劣情ではなく、有縁の友と共に、いよいよ、遙かに崇く、明るい慈光の世界を讃仰して、人生の幸福を満喫したいためである。

左掲のものは、七七日の法要に當つて、靈前に披れきた感懐の一節であり、断片で、意をつくさなけれども、御笑讀いただければ幸甚である。

どうせ一度は何時の日か、別れにやならぬ人生と、かねて承知はするものの、よもや斯うしてコノ父が、あなたの法事をしようとは、ああ、知らなんだ知らなんだ。

あなたが戦に行つたときや、勿論あなたも死ぬる氣で、わたしもあなたを死なす氣で、笑つて出した父なれど、生命拾うて戻り來て、平和平和に国中が、若人の世になつて見りや、殊に仕事が教員で、あつたあなたは是からの、新らしい世の立てかえに、若い希望を燃やしたし、その床しさに此父も、微力なれども手を添えて、理想の道をすくすくと、樂にあんたが進むよう、祈つてあげよう、してあげよう、そうすることがコノ父の、父と呼ばれて世に生きる、ねうちぢやも

勿体なや祖師は紙子の九十年

親鸞聖人は九十年の生涯、貧乏でお暮しになつた。しかし聖人のお心は、そうした地上の貧富を超越して、永遠の生命、無辺の光明を満喫しておられた。そして身をもつて煩惱即菩提ということを経験されて、われわれ後に來るもののため、模範的生涯を送られたのである。笑つて餓死する、その境地からこそ、ほんとうの正しい人間のふみゆくべき道が開けてくる。そしてそれは、大道坦坦春風面をふき、見るもの聞くものわれに快く、天地は一大樂境と變じた別世界であるのである。

のと樂しみに、心に期した父だつた。

やがて可愛い孫が出來、あなたは若い父になり、いと賑やかな家のうち、あれや是やと將來の、希望に笑う花が咲き、鼻の表換えたのも、あなたと共に初孫の、先の先まで幸あれと、祈る心を來春は、あなたの友を呼び入れて、節句を祝うためだつた。

ああそれなのにその鼻、敷いてあなたの七七日、親類知己が集つて、手に珠数かけてコノ部屋は、肅然として声もない。夢かと思えど夢でない。あなたは既に佛壇の、中に小さく納つて、呼べど答えず永久に、やさしい声で、父と呼んでは呉れぬのだ、なつかしい目でアノ顔で、父を迎えて呉れぬのだ。

思えば二十七年の、父よと言つた子と言つた、親しい縁は夏の夜の、短い夢と消え失せて、今は恋しい過ぎし日の、ただ思い出に泣くばかり。

けに人生は朝の間の、草の葉末に乗る露のごと、我や先、人や先、消える身ぢやとはかねてから、聞いては居れど見て居れど、その現実がまのあたり、わが身の上に來て見れば、あきらめきれぬ今日の仕儀、今更歸らぬ事なれど、思い返せばその間、わたしは愚痴な父だつた、わたしは無智な親だつた。

あなたが七つ学校に、あがつてからと云うものは、やれよ、やれよとはけまして、敗けちやいけぬと言いつめて、すいぶんあなたを苦しめた。それはあなたの身のためを思えば

こそと一應の、理由はあろう、さりながら、よく考えりや此父の、見栄をつくろう貪慾の、我まん我慾の心から、あなたにまでも無茶苦茶に、虚栄を強いた、無理言うた、それでもあなたは此父の、言葉をもつて頑張つた。

特に管所に行つてから、あなたの弱い体力で、人に負けずに劣らずに、飽くまで頑張り抜いたのは、男だてとは言いながら、あなたにやすいぶん無理だつた。さぞ辛い日もあつたらう、苦しい思いしただらう。この度病を得た事も、それがねもとに違いない……………。

あゝすみません文男さん、あなたは何もとがめねど、くやしい父の此胸は、今更柿を供えても、泣いて写真を抱いても、後に返らず、つぐなえず、あなたの手垢にすり切れた、書棚に残る沢山の、書籍ながめる父の眼は、何時も涙に曇るぞや。

さは、さりながら珠数かけて、涙おさえてしみじみと、位牌の前にひさまづきや、何か知らぬがなつかしい。無言の聲が聞え来て、何とも言えぬ感激の、又も涙がにじみ出る。

すなわち親鸞聖人が、残しおかれた御教化の「久遠劫より流轉せる、苦惱の舊里はすてがたく、未だ生れぬ安養の、淨土は恋しと思わない、それほど深い煩惱のかたまり故にみ佛が、深く憐れみましまして、淨土を構え給うなり。名残り惜しく思えども、娑婆の業縁つき果てて、力なくなく終るとき、彌陀の淨土へ參るなり。參る心の無いものを、こに憐れみ給うぞ」と、のたもうわけが此の度は、しみじみ胸に届くぞや。

旨を知れと身をもつて、しみじみ父に教えたぞ……………。

けに人生の幸福は、金ではないぞ名でないぞ、派手な渡世をするだけが、人のねうちぢやなかつたぞ、大悲の船に乗せられて、光の海に浮いて見りや、至徳の風がしづしづと、心にかかる浪は無く、いつもお慈悲に満足の、まことの平和恵まるる。それが大事と此度は、あなたは父に教えたぞ……………。

さればあなたが植えおいた、形見の花のあの孫は、父が必ずこの胸に、しつかと抱いて何処までも、守り育ててあげろぞや、よく培うて御慈悲の中に咲かしてあげろぞや。さても可愛やこの孫は、あなたの遺牌に這い寄つて、まんまんと

や。

思や短い生涯で、あなたは先に往つたけど、ここに姿は見えねども、死んだのぢやないこの娑婆の、苦惱の縁を断ち切つて、彌陀の光に守られて、今は正しく常樂の、涅槃の都へ生れ出て、娑婆のきづなに何時までも、悩みつづけるこの父を、憐れみまもつて呉れるのだ。即ちあなたは此父を、残して先に往つたけど、父も必ずみ佛の、慈悲の御手に救われて、いづれあなたの後追うて、彌陀の淨土で父と子が、手に手を取つて語るのだ。あなたは言わねども、今はさとの世界から、じつと眺めて此父の、やがて往く日をねんごろに、待つて誓つて呉れるのだ。さてもしばしの別れかな。

思や此世は假りの宿、向うの岸が本の宿、彌陀のお慈悲に抱かれて、向うの宿について見りや、慈悲の光で明かに、久遠の闇の夜が明けて、そこは晴れやか煩惱の、勝つた敗けたの風もなく、そこは爽か執着の、おしい欲しいの雲もなく、どこどこまでも、いつまでも、光る生命を保つのだ。然るを我等凡俗は、泡にも同じ人生の、明日も分らぬ生命を、それとも知らず今日の日の、惜しい欲しいにとらわれて、いと恋しに奪われて、無暗に愚痴を繰りかえし、それを愚痴とも気がつかぬ。そればかりで終るのを、憐れみましてみ佛が、影の形にそうごとく、護らせ給う絶対の、まことは更に気がつかず、むしりやたらに今日の日の、損ちや得ちやに氣をとられ、勝つた負けたにかかわつて、ただうかうかと目を立てる。それをあなたは此度は、さとれよさめよ御慈悲の、御

まと戯れて、遊んでいるぞよろこぶぞ。今は何にも知らぬけど、この娘にや父がない、嬉しい時に、泣く時に、抱いてくれる父がない、諫めてくれる父がない……………。

嗚呼不可思議の縁により、いまありありとみ佛の、慈悲の世界が見えてみりや、父はあなたの在りし日の、あの懐かしい思い出を、憶ふたんに念佛が、たゆまず胸に湧いて出て、露の命の人生の、運が不運が何のその、ただほれほれとおん慈悲の、中にどつしり「いざさらば、雪見にころぶところまで」歎持つ畑の一時も、飯食う晝の一時も、み名を唱えてよろこんで、今日のつとめを励むぞや。

疾病と求道

醫師 麻生 介

吾々が病氣にかかると、平生健康な時の心持とはちがひ、種々な煩悶や苦惱が起つて来て、相當に修養の出来て居つた者でも、氣短くなり、愚痴を起しやすくなる。しかしそのために一層病氣を重くすることがある。おまけに周囲の人々にまであたりがひどく、迷惑をかける様になる。

自分では腹を立てたり、愚痴をおこしたり、クヨクヨ考えることはよくないと充分承知して居りながら、なかなかそれがやまない。如何に考え直してみたところまで到底止まないから縁にふれるとまた起つて来る。然るに世間では大抵の人が病氣さえ治れば、こんなつらい思いはなくなるから早く治し

て貰い度いと云わるる。

「代金はいくら高くてもよいから良い薬を下さい」

という注文は、吾々醫師がよく聞くとところである。心の煩悶が救われることよりも、身體の病氣を治す方が急務であるからと、唯病氣の事にのみとらわれることになる。もつとも病氣にかかつた上では、其治療や養生について最善の方法をとることは勿論必要である、決して其手当をおろそかにしてはならぬ。唯然しながら、それでよし病氣が治つたからというて、心の煩悶は永久に止むものではない。何故かと申せば、「一難去れば一難来る」のが世のありさまであるから、心の上には眞の解決が出来ていない限り、煩悶苦惱の根は絶えない。若し不幸にして治らない場合は解決の出来ないまま暗路に迷い行くほかはない。故安波動八氏は

「人間が病氣にかかると、唯病氣が治りさえすれば、自分は満足だと考えている。さて病氣が治つて果して自分は満足が出来たかというに、忽ちお金が欲しいになつてくる。お金が出来てさて自分は救われているかというに、忽ち名譽を得たいになつてくる。つまり自分という者は限りない慾望の持主である」

といわれた。誠に吾々の心はその通りである。

病氣は肉體的のもののみでなく、精神的の病氣でも、必ず醫師の治療を受けるのが最善の方法である。世間では神佛におすがりして、そのお蔭によつて病氣を治し度いという思惑から、トンダ迷信になることがある。医師はそのために手お

態に陥つた際に、自分で餘命いくばくもないことを承知して居る所へ、某博士が来て、

「ナニニ大丈夫、其様に心配しないで治るよ」

というて、治る方に力をつけたが、よく自分の病症を知つて居るその病人は

「アナタがそんな氣やすめを言われても最早私は駄目です」

と答えて、何等の慰安にもならなかつたという実例がある。

又其反対に病人自身で

「今度の病氣は必ず治ると自信しています」

などと自分決めに治る方の側に安心して居られる方もありますが、其自信が裏切られる時は非常に失望落膽する事はきまつて居る。

然るに私の経験から申せば、其の死ということを現在自身自身の問題として考える人は甚だまれな様である。たゞい醫師から治らない事を暗示されても、どうかしたら治るだろう、どうしてなりと今一度は達者な身になつて再び活動して見たいとのみ考えて居る。餘りに治りたい方の思惑が強い爲に、治らぬ側などはすこしも考慮する餘地がないことになる。

又医師は人情として、病人に向つて自分の考えを包まずに、直接判然死の宣告を下すという事はない。そこで先の例のようについ心にもない氣安めをいうて其場を逃れるのが普

くればなつた実例を見るのが少くない。學問や智慧のある人でも、病氣のつらいところに「治してやるといふ神佛がある」と言われると、其声の方に心がたむくのも無理はない。併し「こちらの方から神佛に向つて一心に御願いするか、その代り病氣だけは是非治して下さい」というなら、まるで神佛と五分五分の交際をして居るかたちである。それでは満足安心の出来よう筈がない。

一体こちらの方から病氣をよくして欲しいと、頼むところのはからいで治ると思うのが大きな間違ひである。自分の思惑を主として神佛を自分に従わせようとするのが自分の迷信である。

「如來の廻向に帰入して、願作佛心うる人は、自力の廻向すてはてて、利益有情はきはもなし」

という御和讃があるが、實際に佛の御廻向に腹がふくれて見れば、こちらの方から願つたり祈つたりする必要は毛頭ない。こちらの方からの願や祈りが未だ通らぬのと同時に効果がないことは信仰の上からはつきりする。そこで私は、病氣が治るといふ方の側に聞ゆる声は未だ通つた眞實の光ではないと申したい。タトイ病氣は一時治つて神佛の御利益があつたようでも、それでは眞に永遠の満足に出来ない。何となれば、人生の最終点は死の暗黒面であるから、其方向には不安の影が横たわつて居る。誰しも死といふことは嫌いであるが、また誰しも一度は必ずのがるることの出来ないのが死である。或る時、医科大学を卒業した人で病氣にかかり、いよいよ重

通である。それだから病人でも死を自分の實際問題として痛切に感ずることがすくなく且つ困難である。

私が平素、達者な人に向つて信仰の話をする時、多くの人はどうかというに

「病氣にでもかかつて見るとか何とか時機がなければ、信仰には入れないだろう。大抵何かひどい目に逢つてから信仰に目覚める人が多いように見受けるから」

というて、死といふことを遠方に押しやつてしまつて居るのが通例である。然るに生死は一枚紙の裏表であるから餘り遠方にながむるのは間違ひである。

「朝には紅顔ありて夕には白骨となる」

のがお互いである。老少不定・火宅無常の人生である。

「今までは人のことだと思つたに、おれが死ぬとはこいつたまらぬ」

という狂歌はよくうがつて居る。實際自分自身の死に行き詰つてみれば、何とも仕て見様がない。或る金満家が死ぬる時に

「ア、淋しい、何か握らして呉れ」

と言われたそうである。實際自分が死ぬることになれば、手も足もでない。淋しいたよりないばかりで全くどうする事も出来ない。人間としてこれ程困つた、嫌な問題はまたあり得ない。然るに誰でも一度は死ぬるから仕方がないと、一人で諦めて深く考えないのが普通である。それだから淋しいたよりない點はそのままである。中には死にさえすれば萬事

解決するように思うて

「此の様な苦しい病氣をして長く生きてゐるよりも早く死んだ方がましだ」

などと自由を言うて暗に迷ひ行く人もある。

要するに如何に仕合せのよい人でも何程平和な日暮をして居らるる人でも、死という問題をもたぬものは一人もない。唯平生無事な時はそれを問題にせず、遠方に見てウカウカ日を送つて居るに過ぎない。然るに皆様のうちに病氣にかかり、死という實際問題に直面して居らるる方がありとすれば、達者な人よりも一層一日も早く眞面目に且徹底的に解決、即ち信仰の道に進むべき又とないよい機会である。若し餘り病氣が重くなると、苦痛が増してとても道を求むるなどという氣力もなく、大事をとりそこなう事を断言しておきます。

さていよいよ病氣にかかり、

「今生死岸頭に立つて居る」

となれば何が頼みになり力になるものがあるでしょうか。

家族・信友・地位・資産・名譽等は勿論大切なこの身體を捨てて出かけなければならぬ。

「大丈夫治りますよ」

という治る方の側に聞ゆる声は少しも力にならぬ。治らぬ死の暗黒面の有り丈を見て

「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝をまもらん、総て水火の難に墮することをおそれざれ」

信 味 點 滴

他方とは、他の力であり、彌陀佛の本願力である。

人若し眞に他方に帰すれば、其人は淨界に住む人である。淨界の光明を蒙つて己の眞相も知らされ、己の眞相を知らされる故に、他の人々のあらゆる立場も理解出来るというものだ。

他力本願という言葉に依頼心の代表のように最近の新聞雑誌は乱用しているが、そんなのを見ると、かかる新聞や雑誌が社会や世界を誤報するものの代表のように私には見える。

「唯除五逆誹謗正法」とは十八願にのみ掲げられた大切な御言葉である。「五逆の罪を犯し正法を誹謗する者をば唯のぞくとなり」。

律法主義者も、放縱主義者も、この関所一つに廻心させられるところである。

○ 近角先生の御導きを深く身にいただいたOさんという方がある。大阪で戦災をうけて滋賀縣に移住されているが、元來がラヂオの修繕職であつたが湖水の魚も商つて居られる。或日魚の商で釣錢をすこし間違われた時、

「あなたのような佛法者が釣錢を誤間かすはづはないと思

との西岸上のあたたかき彌陀佛招喚の勅命一つが力となり、南無阿彌陀佛一つが頼みとなり、未通る道となるのが、私の信仰である。この勅命一つを眞に死に直面したお方に聞いていただき度い。死の暗黒面に氣すかれ、且悩まる方であれば、きつと聞きとられて満足・安心さるるに違いない。某大徳の辭世の詞に

「病重く今日此世を去る。七十餘年迷夢晴る。死に臨んで心中一物なし、唯聞く岸上招喚の声」

というのがある。死に臨んで見れば心中一物として役に立つものはない。死の暗黒面全體をかねて見抜いてよびかけ給う大慈大悲にみちびかれ、眞実の報土に目覚めさせられるの外はない。この境地に満足させねばおかぬ、絶対の力が佛の本願であるから、この点繰り返し繰り返して聞いて居られると必ず徹底する時が來るに相違ないのであります。これを蓮如上人は「いたりてかたきは石なり、いたりてやはらかなるは水なり、水よく石をうがつ、心源もし徹しなば、菩提の覺道何事が成ぜざらん、といへる古き詞あり。いかに不信なりとも、聽聞を心にいれ申さば、御慈悲にて候間信をうべきなり。云々」

と訓えられている。

うが、実はこれだけ足らぬので云々」

とお客様から言われ、口では言わぬが、

「それはそうだ、俺は佛法者であるから、釣錢など誤間かすはずはない。それをこのお客は認めてくれている」といい氣持になつた。

「これが私の佛法者ぶる心ですなあ！ 内心には釣錢を誤間かした蛇蝎の心が満ち満ちているのに。

○ 若し佛法者のくせに釣錢を誤間かすとは、と言われどもしたら、たちまち修羅をもやすくせに」

「たとい牛盜人と言われようとも、佛法者、後世者ぶるな」とは、佛法者後世者ぶる心のやまぬことを見抜かれての上の蓮如上人のお慈悲の声である。

○ 自分には佛法者ぶる心はないと思ひあがつている人には、上人の御心が頂戴出來ぬ。

「山に入るといふも名のころ、山を出づといふも利のころ」と訓えられる。入るも、出るも、名利ならざるなく、愛欲ならぬはない。今度私自身が外出を禁ぜられ工、沁々とこの御訓を身に頂いている。

編集後記

御心配いただいています私の痼疾も、退院後、減食・野菜食・禁煙・静居等を續け發作もおこらずに静養しています故御休心下さい。誌上をかり厚く御禮申上げます。

先月末、白井先生の御慰問をいただき、其の節「見舞の積りで原稿を送りましょう」との御言葉を下され、今後誌上に一段の光彩を加えて下さると思召の程有り難く頂きました。

其の節佐々木医院での談話會で、國定教科書に「天は自ら助くる者を助く」として、他方本願はいけないと、誌されてあるがこれはもつこの外であると歎かれ、早、文部省に改訂をして貰われはならぬと申しておられたそりである。志ある方々の御熟考を乞う次第であります。具体策もお考え願います。

▲「法然聖人の常の仰」を巻頭に掲げさせて頂きました。常の仰というものは、何度も何度も讀ませて頂き、御真意を日々の生活の上に頂き度いものです。

▲「法然聖人の確信」は世界史上類例のない鮮明な御信證であります。原文意譯の部は池山先生のそれを頂きました。

▲「笑つて餓死する」は中野駿太郎氏の信の極限を提唱して下さつたもので、大悲の底をついたお言葉であります。

▲「松村繁雄氏の「亡き長男文男と語る」の

一文は、無事戦地から復員され乍らも、戦時の無理から發病され、お孫様を残して三年前逝かれた御長男への切々哀々たる弔詞と、それを超えて輝く大悲の讃仰であります。今回の戦で子を、夫を、兄弟を失われた方々に特に御味讀をお願い申します。

▲「疾病と求道」は藤生介氏の「疾病と信仰」の御著から頂戴いたしました。現に病む私によき慈訓であります。

本田惠孝師は三月末以來痼疾(尿道閉塞)に倒れられ入院御加養中だったが、六月末に、九死に一生を得て退院され、目下名古屋市中村区岩塚町の御寓居中ですが、毎月六日と廿八日、第一と第二日曜と第三土曜には、寢台の上から御法話を續けていられます。「今度は餘命いくばくも無き故、皆の人々へ早く、我意を傳えよとの御冥慮に候」と御述懐をおもらし下さつております。ねむれる私共は大いなる警鐘であり、西岸上大悲倦むなき御姿であります。

書籍 照介

「子の死と淨土」 彦根經專教授、石田與平著 定價一〇〇送料一〇 京都市下京區高倉通り六條上ル。高倉會館内涉成苑、振替京都二六〇八番

昭和二十五年八月十日印刷
昭和二十五年八月十五日發行
毎月一回十五日發行

定價 一部金拾五円(郵稅共)
一分金百八拾円(郵稅共)

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九

編集兼 花田正夫
發行人

名古屋市千種區千種町馬走二八

印刷人 本伍郎

名古屋市千種區千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市昭和區内幸樂町二ノ二九

花田正夫方

發行所 慈光社

振替口座番號 名古屋一〇四七〇番